



東北大学大学院 国際文化研究科



GSICS
TOHOKU UNIVERSITY

GLOBE

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp>

国際文化研究科 広報

No. 34

Oct 2021



Contents

02 研究科長メッセージ

03 コロナ禍の
国際文化研究科

06 退職教員からの言葉

岡田 毅 教授
黒田 卓 教授

07 新任教員紹介

大窪 和明 准教授

08 修了者からのメッセージ

間 秋君 さん
大内 沙織 さん

09 留学報告

亀山 光明 さん
受賞報告

10 科研費採択一覧

12 INFORMATION

- キャリア講習会
- 公開講座
- オンライン入試説明会
- 入学試験情報

研究科長メッセージ

新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、令和3(2021)年度になっても終息の見通しが立たないままです。学生の多数が留学生である本研究科にとっては、国際的な往来が制限される中でどのように学生を入学させ、授業と研究指導を提供し、修了に導くのかは非常に重要な課題です。

私たちは、昨年度と今年度は入学試験をオンライン方式に変更し、日本に入国せずとも、あるいは日本国内で仙台市に移動せずとも受験することを可能にしました。また、入学試験に合格した学生が日本に入国できない状態にあっても、支障なく授業を履修し研究指導を受けられるように「在外修学」制度を制定し、昨年度後期から運用しています。とは言え、学生諸君が仙台で生活し、教員や同僚学生と直に交流することの恩恵はオンラインでは得ることが難しいことも否定できません。パンデミックの終息を願うばかりです。

さてそのような中、私たち国際文化研究科は入学試験の制度に変更を予定しています。これまでは筆記試験(令和2年度と3年度に実施している試験ではオンラインでの口述試験という形で実施)において専門科目と外国語科目の試験を行ってきました。これら2つの科目に変更はないのですが、外国語科目の実施に変更を予定しています。

具体的には、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語の試験について、令和4(2022)年度に実施する令和5(2023)年度入学試験から、入学試験日に筆記試験を行うことを止め、代わりに外部機関による外国語資格・検定試験(以下、外部テストと呼ぶことにします)の成績証明書を提出していただくことを予定しています。外部テストの成績証明書の提出により外国語科目の試験を行うことは、これまでも上記の4語種で筆記試験の代わりに選択することが可能でしたが、令和5(2023)年度入学試験からはそれが唯一の方法となります。なお、上記以外の語種、すなわち日本語、中国語、朝鮮語、ロシア語ではすでに外部テストの成績提出のみで外国語の学力を測っております。

この制度変更の背景には、従来の筆記試験では測ることが難しい技能を外部テストの成績から確認することが可能であるということがあります。従来の私たちの筆記試験では読解と作文の問題はありましたが、リスニングの問題はありませんでした。これに対して、外部テストでは読解と作文に加え、リスニングの問題が出

題されます(テストによってはスピーキングが課されるものもあります)。外部テストの成績から受験者の外国語の学力をより幅広く測ることが可能になります。

国際文化研究科で行われている研究では、分野により様々な国・地域で使用される言語に関する知識が必要とされることがあります。また、私たちのディプロマポリシーでは、外国語運用能力を含む優れたコミュニケーション能力を持つ人材を輩出することを謳っております。実際に、平成27(2015)年4月と平成31(2019)年6月に実施した本研究科修了生が就職している企業等へのアンケート調査において、本研究科修了生の外国語能力が「非常にあると思う」という回答がそれぞれ40%と56%、「あると思う」という回答がそれぞれ40%と22%の企業等からありました。

留学生向けの日本語を含め8つの語種を外国語試験の科目にしているというのは、本研究科の特色の1つと行うことができず。そこには、国際文化研究科における研究と、上述した私たちの人材養成の目標が反映されています。本研究科の受験を予定している方には、計画的に外部テストを受験され、入学後の更なる飛躍の土台となる外国語能力を示していただきたいと思いません。関連した情報は研究科ウェブサイトに掲載されていますのでぜひご覧ください。

国際文化研究科長
高橋 大厚



コロナ禍の国際文化研究科

■ 教務的対応について

令和2年度第1学期の研究科授業はすべてオンラインで実施されましたが、第2学期には新型コロナウイルス感染症の流行状況がやや改善したため、オンラインと対面式の併用という形で実施することになりました。対面授業には研究科棟1階4教室のほか、マルチメディア棟6階及び405教室、合同棟531教室、西棟207教室を当て、学生のオンライン授業受信用自習室を西棟203、204教室に移しました。それぞれ通常授業定員の4分の1ほどの定員に抑え、使用の際に遵守すべき事項の周知を行い、フェイスガードを研究科費用で購入して準備を整えました。使用を希望する教員は使用申請書類を提出し、教室の調整等を行いながら実施いたしました。その後、教員の希望に応え、授業ビデオ録画用の教室も確保しました。また、日本に留学する予定の学生が来日できない状況が続いたため、入国せずに修学できる「在外修学」に関する規程を9月2日の臨時教授会で制定し、制度を整えました。

年末から年明けにかけて再び感染状況が悪化したため、大学本部は1月8日付でBCPの内容を改訂しつつレベル2に引き上げました。これにより授業は再び原則的にオンラインに戻りました。1月下旬に実施された各種発表会も、7月に続いてGoogle MeetとGoogle Driveを使用してのオンライン開催となりましたが、大きな問題なく終了しました。

令和2年度末の修了証書伝達式や令和3年度初めのオリエンテーションもオンラインで実施されました。また、3月31日付で大学のBCPの再改定とレベル3への引き上げがありましたが、改訂後のBCPでは授業は原則オンラインで変化はなく、令和3年度の研究科授業もオンラインで始まりました。令和2年度は第1学期の開始が遅れるなどコロナの影響で学年歴に変更がありましたが、令和3年度はオリンピック対応での変更の他は通常通りとなっています。その後、感染状況が落ち着き5月12日付で大学のBCPがレベル2に引き下げられたため、研究科でも同月の教務委員会での承認を経て対面授業を再開しました。令和3年度予算で、対面授業を実施する教室に配置するCO₂濃度假定器を購入し、換気の目安にできるようにしました(写真参照)。7月の各種発表会も昨年が続いてオンライン開催となっており、コロナ対応が続いています。



■ 令和3年度入学試験の実施について

令和2年に実施した本研究科の入学試験はすべてオンライン方式で行われました。本研究科の入学試験は一般選抜、海外特別選抜、および二つの英語コースの選抜に大別され、後二者の入学試験は以前から書類審査やオンラインによる面接試験が行われていましたが、令和2年春以降の新型コロナウイルスの感染拡大傾向を受け、令和2年7月に一般選抜においてもオンライン方式に変更することを決定しました。

本研究科の一般選抜試験には、9月の秋季入試と2月の春季入試があります。これまではそのいずれにおいても専門試験、外国語試験、および面接試験を二日間にわたり実施してきましたが、オンライン方式による入試においては前二者の試験に代わる試験として「口述試験」を新たに設けました。なお、受験者には希望する専攻分野から出された課題を事前に回答してもらい、それも参考にしながら口

述試験を行いました。

今回のオンライン入試では以上の口述試験と面接試験を連続して行うことにより、受験者は一日で試験を終えることができました。

今回のオンライン入試は初の試みであることから、入試業務に関わる教員に対しては技術説明会を行い、受験生に対しては接続テストを行って不測の事態が起こらないように努めました。その甲斐あって、秋季入試と春季入試のいずれにおいてもトラブルは一切なく、無事入試を終えることができました。

なお、令和3年9月の令和4年度秋季入試もオンライン方式で実施されましたが、来年2月に予定されている春季入試の実施形態は現時点ではまだ決定していません。本研究科への入学を考えている方は研究科HPのチェックをよろしくお願いします。

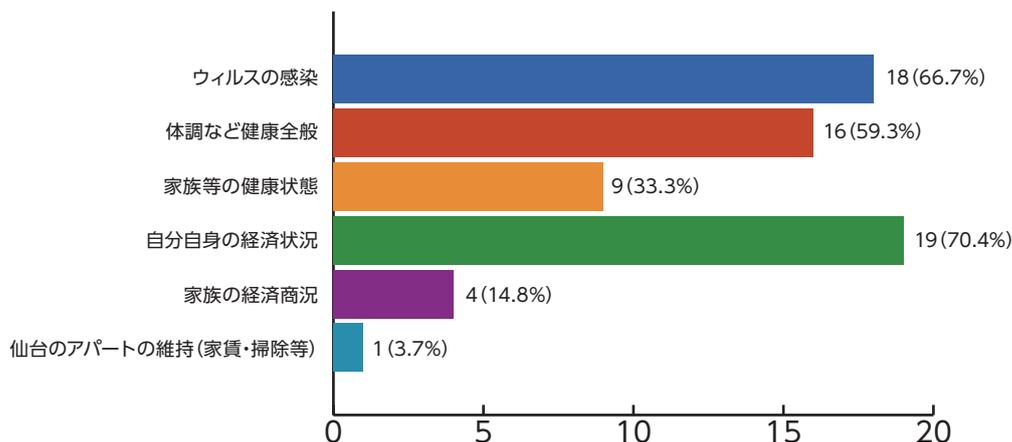
■ 新型コロナウイルス感染症拡大の学生生活への影響調査報告

東北大学の行動指針(BCP: Behavior and Conduct Policy)は、2021年5月から引き上げられたり、引き下げられたりを繰り返しています。現在はBCPレベル2で、新型コロナウイルス(COVID-19)感染症は終息の兆しをみせず、予断を許さない状況が続いています。昨年が続いて2021年6月に、国際文化研究科学生進路・指導委員会では、研究科が取り組むべき具体的な対応策を検討する目的で、研究科所属の学生がどのような問題や不安を感じているか、研究科にど

のような期待を寄せているかを調査しました。調査期間は本年5月31日～6月7日で、本研究科の各講座の学生、及び英語コース(言語総合科学コース[IGPLS]、グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム[G2SD])所属の学生を対象に行われました(回答数は講座学生102名中74名、英語コース学生30名中22名)。主な質問事項は「生活面での不安」「授業・研究活動面での不安」「就職活動に関する不安」でした。

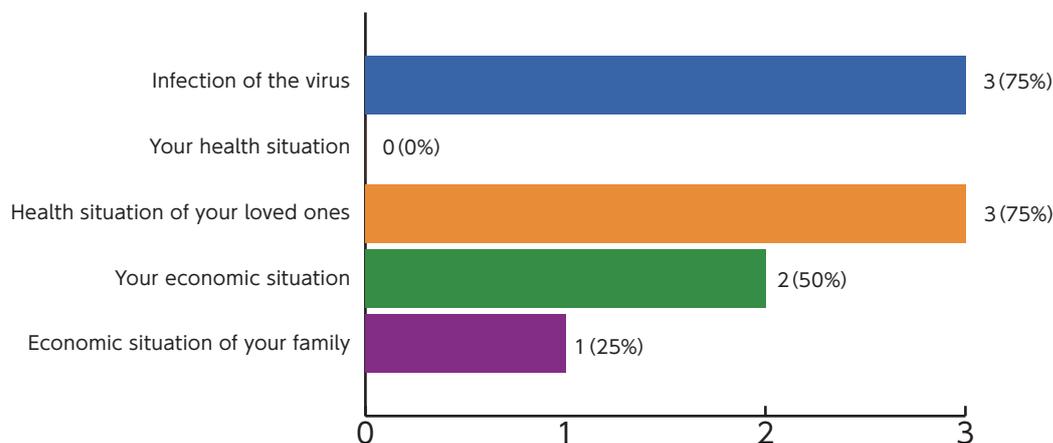
生活面での不安(講座学生) …不安を感じる 36.5%/不安を感じない 63.5%

特に生活面で不安を感じる項目



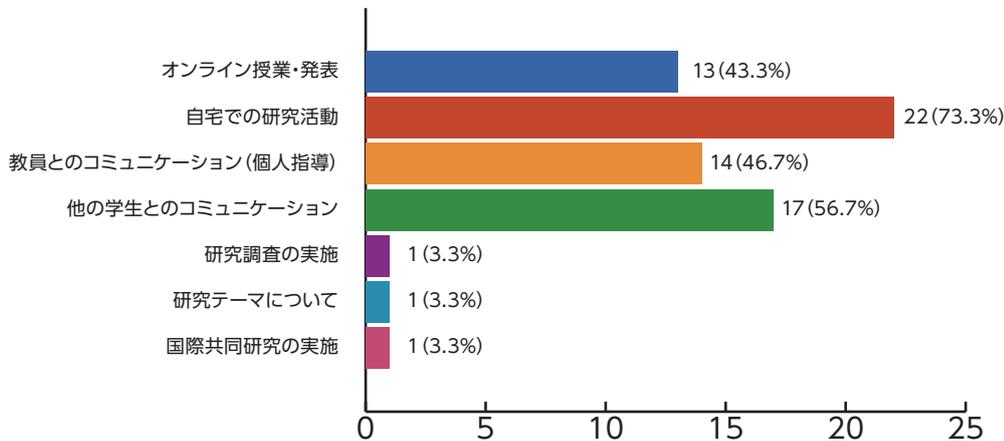
生活面での不安(英語コース学生) …不安を感じる 18.8%/不安を感じない 81.8%

特に生活面で不安を感じる項目



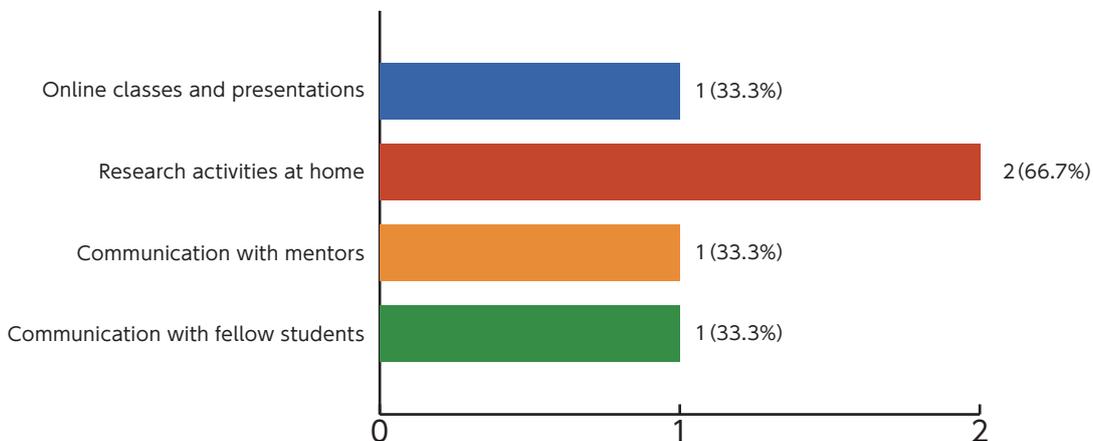
授業・研究活動面での不安（講座学生）…不安を感じる 40.5%/不安を感じない 59.5%

特に授業・研究活動面で不安を感じる項目



授業・研究活動面での不安（英語コース学生）…不安を感じる 13.6%/不安を感じない 86.4%

特に授業・研究活動面で不安を感じる項目



2020年5月と11月に実施したアンケートの結果と比較すると、生活面では不安を感じる割合が大幅に減少していました。大学や部局からの支援や情報発信も不安を軽減している一因と考えられます。しかし、授業・研究活動面では、自宅での研究活動が続いているため研究資料の収集の難しさ、教員及び他の学生とのコミュニケーションの不足に不安を抱えていることが分かりました。これを受け、授業や演習だけでなく、Google Meetなどを用いたリアルタイムでの個人指導や学生間での親睦活動も

推進しています。また、留学生は一時帰国ができず、母国での就職活動が困難であること、就職に関する情報収集が難しいことなどから、就職における不安を感じているという回答も複数ありました。6月から8月にかけて東北大学ではワクチン接種も進んでいますが、先が読めないコロナの状況が長く続いています。研究科では、今後さらなる生活・心理的サポート、安全で教育や研究活動に集中できるように最大限の対策を続けて推進していきます。

退職教員からの言葉



応用言語研究講座

教授

岡田 毅

定年退職に際して

駿台下の三省堂書店外商部の応接室のソファでお茶をふるまってもらっていたのは、ついこの前まで、非常勤講師の仕事で得たわずかな現金を握りしめて、洋書部の言語学関係の書棚の前で嘆息していた28歳の若造でした。「2年後に新設する英語科が設置審に通るために図書館に揃える基本図書を選んでほしい」と雑誌『英語青年』の公募に応募して採用が決まった浜松短期大学の学長先生から直接の電話があり「伝統的な英語学は教授を2名も採用するから、君は最新の言語学の分野でよい。予算は気にせず、どんどん購入手続きをしてほしい」と付け加えられました。これまでの鬱憤を晴らすべく、実物やカタログにチェックを入れた文献を片っ端から買まくった爽快感が忘れられません。特に生成文法関連のジャーナルの年間購読料が数十万円の時代でした。

昭和61年4月、新設となった英語科に赴任した時には、短大図書館のあまりの充実ぶりに静岡大学から視察団が来たほどでした。建物も研究室も何もかも最新鋭。担当を任せ

たLL教室のコンソールSONY LLC-9000は、宇宙船の操縦席のようなタッチパネル式でした。すんなりと購入が許された「パソコンで字幕が入れられるビデオ編集装置一式」がたしか400万円以上でした。専用の編集室もありました。そして弱冠33歳で助教授にしてもらいました。それでいて34歳になって、これも雑誌で見かけた公募で山形大学教養部に動きまわりました。浜松の学長は激怒なさいました。

「セッチシン」の洗礼を受けた後は「タイコーカ」「カイン」「カイヘン」「カイカク」ばかりを経験してきました。ロンドンでしばらく研究させてもらって、「ドッポーカ」の初年度に東北大学の国際文化研究科に赴任しました。思えばずっと教務畑の仕事ばかりやってきました。国際文化の「カイン」では皆様にご迷惑をお掛けしましたが無事に定年退職できました。有難うございます。現在、特任教授としてお隣の高度教養教育・学生支援機構にいます。そういえば来年度から全学教育の大「カイカク」です。



アジア・アフリカ研究講座

教授

黒田 卓

初心忘るべからず

研究という営みに手を染めたころの私を衝き動かしていたものは、理屈や打算もあったけれど、やっぱり研究対象の「おもしろさ」だったように思う。研究仲間とも、「それおもしろいね」とか「こんなおもしろいこともありました」とか、何もしがらみのない雰囲気でも話していたのを懐かしく思い出す。

まもなく大学という仕組みの中に身を置き、「おもしろさ」だけではやっていけない、と気づき始めたころ、今でいう「FD」があり、当時日本で唯一の高等教育の研究センターを設けていた広島大学の先生が講演に来られた。この先生は、大学の教育や研究にもP(計画)、D(実施)、C(評価)が必要だと力説された。昨今当たり前になったPDCA(このとき確かAのAct[改善]は言及されなかったと記憶している)サイクルというやつである。まだ若輩だった私には、この講演のときに「Check(点検、評価)」には、何か違和感があり、合点がいかなかったのをいまでも覚えている。大学教育を研究することが今までほとんどなされてこなかったのは、それが本来自由で多様な大学には馴染まない営為だったからではないか、などと生意気な意見を先輩の先生方にも吐いていた。

このような私の考えは、今では笑止千万。主要な大学には押し並べて、高等教育研究センターが存在している。大学の 대중化や

大学が社会に対し自己説明・発信すべきという要請が強まっていったことも一因だろう。なかでも「評価」は大学の活動を計測するキーワードで、ますます精緻になり、ますます広範囲に及ぶようになっていく。当初は大雑把な「自己評価」だったのが、数値での証拠だのと言われ出し、個々の部局や教員個人の予算や給与にまで波及するようになってきた。「評価疲れ」というような現象まで指摘されている。

かくいう私も現職の教官・教員であったときは、「まじめに」、管理職になったときにはもはや職務上「率先して」この「評価」に取り組んできたといっても過言でない。いまだに呪縛のごとく、科研費の申請や審査、外部委員として共同研究の審査で「評価」に当たっている。しかしである。大学を離れたいま、「評価」自体は決して間違ったことではないが、あたかも「物神化」し過ぎているのでは、と思うのである。退役した老兵の戯れ言かもしれないが、「おもしろさ」を忘れないでいるというのも大事だよなあ、と最近しみじみ思う。

ともあれ、こんな境地になるまで大学で曲がりなりにも勤め上げられたのも、同僚の先生方、支えてくださった事務方の皆さま、何かにつけ刺激をくれた学生たち、の助けや励みがあってこそ。あらためて深甚なる感謝の意を表したい。



新任教員紹介



国際環境資源政策論講座

准教授

大窪 和明

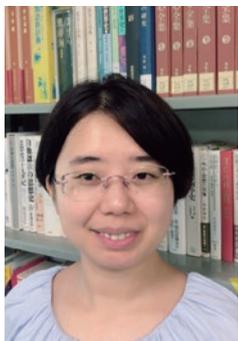
2021年4月から国際文化研究科 国際環境資源政策論講座に准教授として着任しました大窪和明と申します。茨城県の出身で、東北大学工学部に入学してから本学大学院情報科学研究科にて学位取得後、東北アジア研究センターに勤務し、およそ12年間を仙台で過ごしました。その後、埼玉大学、愛媛大学に務めた後、2018年12月から東北大学大学院国際文化研究科に助教として着任しました。

私は持続可能な社会のための社会基盤施設のマネジメントや物流・サプライチェーンの最適化を中心に研究しております。統計分析、機械学習や数値最適化手法を駆使して、道路や橋梁といった社会基盤施設の劣化や、人やモノの流れといった様々なデータに隠された因果関係や、そのメカニズムを理解し、その関係性をふまえて、持続可能な社会を構築するために必要な仕組みを提案することを目指しています。

最近では、宮城県内の教育機関におけるSDGs (Sustainable Development Goals)の教育に関わる機会を得て、日本におけるSDGsに関する教育への取り組みの現状や課題についても関心を持つようになり、研究の関心が広がりました。様々な分野の研究者から構成される国際文化研究科の中で広く深く学びながら、より一層、研究・教育活動に邁進して参りたいと思います。



修了者からのメッセージ



アジア・アフリカ研究講座
令和3年3月
博士課程後期3年の課程修了

閻 秋君

充実した5年間

国際文化研究科に在学したこの5年間は、私にとってかけがえのない成長の日々になりました。この学び舎で最も勉強したのは、真摯に研究へと向き合うことだと思います。

それまでの私の学生時代は、いわば短距離走者のように、瞬発力や集中力などでゴールに辿り着くことを得意にしていました。しかし、長距離走者のような日々の積み重ねを大切にする研究では、自分の意識を切り替えなければならないと感じました。そして、国際文化研究科での5年間の在学生活を通じて、地道な取り組みだからこそ見えてくる研究の面白さを発見することができました。

長距離走者をイメージすると、孤独に走る姿が脳裏に浮かんでくるかもしれませんが、実はそうではありません。それは先生方や研究の仲間たちが常に伴走し励ましてくれたからです。特に博士論文執筆の2020年、COVID-19流行による厳しい研究状況の中で、指導教員の勝山稔先生はずっと私の不安に寄り添い、温かく

見守ってくださいました。また、勝山先生をはじめとするアジア・アフリカ研究講座の先生方にも温かいご指導をいただきました。そのおかげで、COVID-19の影響の中でも研究に専念し、博士論文を提出することができました。

また先生方のご指導に加えて、研究仲間との交流も私の貴重な経験になりました。一見自分とは異なるテーマの研究でも、対話を深めていく中で、自分の研究へ有益なサジェスションを与えてくれたからです。例えば、研究科の稲穂会の研究活動では、博士論文を構想する上で大切な研究ビジョンを授けてもらいました。また、何よりも大切なのは、互いに研究の喜びや悩みを共有することで、研究生活や留学生活の楽しみをより深く味わえたことだと思います。

国際文化研究科での研究生活は、私にとって貴重な経験となりました。この経験を活かし、今後も自らのライフワークを進めてゆきたいと思います。



言語科学研究講座
令和3年3月
博士課程前期2年の課程修了

大内 沙織

大学院生活を振り返って

他大学から進学し、新しい環境に期待と不安を抱きながら参加した新入生オリエンテーションから、2年以上の月日が経ちました。

国際文化研究科での2年間は、長いようで短いような2年間でした。

社会人になった今、国際文化研究科で得られた学びは何であったかと振り返ってみると、それは専攻していた英語教育の知識というよりも、「研究とは何か」であったと思います。

思い返してみると、大学院に入学する前の私は、研究というものがどのようなものなのかきちんと理解しないまま、漠然と研究がしてみたいという思いを持っていたような気がします。大学院生活で実際に研究をしていく中で、膨大な量の文献を読み知識をつけなければならなかったり、ある1つの仮説が明らかになったとしても、批判的に捉えさらに思考を巡らせてみたり等、研究の厳しさを知り、研究とは終わりがなく、探求し続けなければならない

ものだということを痛感しました。

しかし、辛いことばかりではなく、特に何か新しい発見があったとき、楽しいと思える瞬間も多くありました。総合演習の時間には、先生方や先輩方からアドバイスをいただく中で、そのような考え方もあるのかと勉強になることが多くありました。学生の中には留学生の方も多く、他の国出身だからこそその意見も聞けたように思います。異文化にも触れられるという点は、国際文化研究科の強みでもありと感じます。

現在私は、研究とも英語教育とも関係のない分野で、社会人として働いています。しかし、仕事の中でも、研究をする中で得られた粘り強さや批判的な視点などは活かされていると感じています。優秀な学生というわけではありませんでしたが、熱心にご指導いただきました先生方や先輩方、後輩たちに感謝しています。在校生の皆さんも、充実した研究生活が送れるよう、一先輩として応援しております。



留学報告



国際日本研究講座
博士課程後期3年の課程

亀山 光明

コロナ禍でのハワイ大学留学

私は宗教学、とくに日本近代宗教史を専門としており、現在、ハワイ大学マノア校にて訪問研究員として滞在しております。今回は主に留学体験や留学のアドバイスなどを書かせていただきたいと思います。2021年2月に私は渡米しましたが、元々は東北大学の交換留学プログラムを通しての渡航を予定していました。しかし、コロナ禍のことで二度の延期となり、ハワイ大学のミシェル・モール教授や宗教学部、東北大学当局と交渉し、幸いにも訪問研究員として渡航できる運びとなりました。ホノルルに到着した当時、人通りも少なく街は閑散としており、商業施設のほとんどが閉鎖されていました。2021年9月現在はアメリカ本土からの観光客も増えてきましたが、新型株の蔓延など予断を許さない状態が続いています。

ハワイ大学ではモール先生の仏教学の授業のほか、宗教学の理論を学ぶ授業の演習に参加しました。アメリカの大学の授業は課題も多く、さらに一コマが約3時間とながく、ディスカッション主体で進められ、ついていくのに苦労しましたが、その分、視野も広がったように思われます。また、受け入れ教員のモール教授とは毎月のミーティングのなかで一対一でのご指導をいただいています。モール教授との面談は、長い時

では3時間以上に及び、英語圏での日本宗教研究のスタイルや研究の位置づけなど、沢山のことを学ばせていただきました。ご指導のおかげで今年7月にはAsian Studies Conference Japan (ASCJ)に提出した英語論文がL. B. Grove Graduate Paper Prizeを受賞し、またいくつかの英語論文も学会誌に投稿中・掲載予定です。さらにL. B. Grove賞の副賞として2022年3月にホノルルで開催予定の北米最大のアジア研究の学会Association for Asian Studies (AAS)での発表が決まっています。このようなことからハワイとの不思議な縁を感じています。

さて、最後に留学を視野に入れている本研究科の学生の方に私の経験から得た若干のアドバイスなどを伝えさせていただきます。まず、留学の手段ですが、私が今回利用した訪問研究員のほか、東北大学には海外の多様な大学と協定を結んだ交換留学プログラムがあります。また、留学の助成につきましても本学独自の奨学金のほか、博士課程では日本学術振興会の若手研究者海外挑戦プログラムなど多くの支援がありますので、ぜひ思い切って挑戦してみるといいかもしれません。研究留学は自らの視野を広げる好機だと思いますので、ぜひお勧めいたします。



受賞報告

○ヨーロッパ・アメリカ研究講座博士後期課程の亀山博之さんが「第一回日本ソロー学会新人賞」を受賞しました。

○第40回日本マクロエンジニアリング学会春季研究大会において国際環境資源政策論講座博士後期課程の小山内詩織さんと劉曉玥さんが「日本マクロエンジニアリング学会奨励賞」を受賞しました。

○鄭嬌婷准教授の「脳科学的アプローチによる第二言語習得研究」が高く評価され、「国際女性デー記念 第4回紫千代萩賞(人文・社会科学分野)」を受賞しました。

○アジア・アフリカ研究講座博士後期課程の大谷亨さんの中国の無常鬼に関する研究が高く評価され、民俗学分野の優れた研究論文に贈られる「櫻井徳太郎賞」の大賞を受賞しました。

○日本マクロエンジニアリング学会第39回秋季研究大会で国際環境資源政策論講座博士後期課程の劉曉玥さんと博士前期課程の小山内詩織さんが「奨励賞」を受賞しました。

○国際環境資源政策論講座博士後期課程の劉曉玥さんが「2020年度生協総研賞・第18回助成事業対象者」に選定されました。

○国際環境資源政策論講座博士後期課程の王燦堯さんが「藤野先生記念奨励賞」を受賞しました。



令和3年度科学研究費補助金採択一覧

氏名	課題番号名	研究種目	新・継	研究課題名	備考
Godart G.Clinton	19H01197	基盤研究(B)	継	越境する日蓮主義の基礎研究—トランスナショナル・ジェンダー・スピリチュアリティ	補助金
ジスク マシュー・ヨセフ	19H01265	基盤研究(B)	継	多言語による日本語学用語辞典および日琉諸語の用例に対するグロス規範の作成	補助金
大河原 知樹	19H01404	基盤研究(B)	継	民法、民事訴訟法におけるイスラーム法と中東法の国際比較研究	補助金
池田 亮	21H00685	基盤研究(B)	新	「航行の自由」と英米覇権—開かれた国際海洋秩序とそれへの挑戦	補助金
青木 俊明	21H01449	基盤研究(B)	新	心理要因と認知バイアスを考慮した居住意思決定理論の実証と縮退地域の居住政策の提案	補助金
佐藤 雪野	21H03699	基盤研究(B)	新	EUにおける移民・難民統合政策の課題と展望—旧社会主義圏を中心に	補助金
KLAUTAU Orion	19F19301	特別研究員奨励費	継	近世ヨーロッパにおける宗教の再概念化と日本のキリスト教宣教	補助金・外国人特別研究員
繁田 真爾	19J00772	特別研究員奨励費	継	近代日本における「監獄教誨」成立史の研究—犯罪・刑罰・宗教—	補助金・特別研究員(PD)
亀山 光明	19J21102	特別研究員奨励費	継	近代日本仏教と戒律—宗教言説史におけるプラクティスの再検討	補助金・特別研究員(DC1)
呉 佩遙	20J21655	特別研究員奨励費	継	近代日本における信仰言説の研究—仏教・歴史・国家	補助金・特別研究員(DC1)
大澤 絢子	21J00625	特別研究員奨励費	新	性に見る近代日本仏教の教祖像—史実と創作の相互関係—	補助金・特別研究員(PD)
君島 彩子	21J40124	特別研究員奨励費	新	東日本大震災後における仏像の役割—誰もが仏像を作る時代の信仰のかたち—	補助金・特別研究員(RPD)
中本 武志	17K02670	基盤研究(C)	継	日中バイリンガル幼児のコード・スイッチングに見られる普遍的制約	基金
勝間田 弘	17KT0117	基盤研究(C)	継	途上国のNGOとグローバル・ガバナンス	基金
勝山 稔	18K00310	基盤研究(C)	継	民間の視座を導入した中国通俗文学の「自国化」の研究—受容文化の多角的戦略—	基金
市川 真理子	18K00365	基盤研究(C)	継	近代初期イギリスの商業劇場における楽屋正面壁の構造と使用方法に関する総合的研究	基金・名誉教授
Jeong Hyeonjeong	18K00776	基盤研究(C)	継	外国語学習を通じた情意や社会性の育成：認知神経科学からの検証	基金
杉浦 謙介	18K00820	基盤研究(C)	継	外国語eラーニング教材の仕様最適化—学習効果・使用者評価・学習実態に基づく研究—	基金
志柿 光浩	18K00821	基盤研究(C)	継	大学外国語教育プログラム内評価に適合したスペイン語スピーキング能力測定手法の開発	基金
野村 啓介	18K01020	基盤研究(C)	継	第二帝制下フランス外交の異文化経験と極東戦略に関する基礎研究	基金
山下 博司	19K00075	基盤研究(C)	継	シンガポールにおける民族集団の多元的共存と宗教・文化政策—宗教間関係を焦点に—	基金・名誉教授
鈴木 美津子	19K00439	基盤研究(C)	継	ロマン主義時代の文学作品に見られるウォレン・ヘースティングズ表象	基金・名誉教授

令和3年9月1日現在

氏名	課題番号名	研究種目	新・継	研究課題名	備考
藤田 恭子	19K00490	基盤研究(C)	継	多言語性の否定と肯定—ルーマニア・ドイツ語文学に見る言語アイデンティティの諸相—	基金
小野 尚之	19K00679	基盤研究(C)	継	名詞から動詞をつくる—事象統合による語彙創造のしくみ	基金
黒田 卓	19K01012	基盤研究(C)	継	イラン系ムスリム知識人がみた近代世界	基金
渡邊 竜太	19K01049	基盤研究(C)	継	チェコ/ドイツ国境地域における20世紀地域社会史	基金・GSICSフェロー
勝間田 弘	19K01519	基盤研究(C)	継	ASEAN外交と国際関係の理論	基金
井川 眞砂	20K00381	基盤研究(C)	継	マーク・トウェイン晩年の批評精神——まなざしは〈笑いの武器〉のその先へ	基金・名誉教授
坂巻 康司	20K00489	基盤研究(C)	継	近現代フランス演劇における〈祝祭〉概念の総括的検討	基金
小原 豊志	20K01032	基盤研究(C)	継	異端のデモクラシー——初期アメリカ合衆国における人民主権論のポピュリズム的展開—	基金
朱 琳	20K01468	基盤研究(C)	継	清末知識人と明治日本の政治学——東アジアにおける連鎖と比較の政治思想史	基金
市川 真理子	21K00338	基盤研究(C)	新	近代初期イギリス演劇における基本的舞台道具の使用方法に関する総合的研究	基金・名誉教授
鈴木 道男	21K00451	基盤研究(C)	新	「国民詩人」の共有とディアスポラ—メディアによる「民族」形成機能と文学	基金
高橋 大厚	21K00519	基盤研究(C)	新	ラベリング理論の精緻化:中国語のスルーシングを通して	基金
江藤 裕之	21K00753	基盤研究(C)	新	香港、タイの大学における課外英語学習支援の現状、及びわが国の大学英語教育への応用	基金
佐野 正人	17K18476	挑戦的研究(萌芽)	継	東アジアにおける戦後歴史認識の横断的研究——戦後初期と1990年代を中心に——	基金
妙木 忍	17K17596	若手研究(B)	継	医学的まなざしと女性の身体—解剖学と展示の政治性をめぐる国際比較研究—	基金
中山 真里子	19K14468	若手研究	継	日英バイリンガルのL2表記表象の解明	基金
大澤 絢子	20K12836	若手研究	継	近代日本における教祖像形成に関する総合的研究--最澄・空海・親鸞・日蓮--	基金・特別研究員(PD)
堀田 智子	21K13032	若手研究	新	日本語学習者の不同意表明にみられる語用論的能力の発達過程	基金・GSICSフェロー
メスロピャン メリネ	21K13085	若手研究	新	Armenian Refugees in the Early 20th c. Japan: Mixed Methods Analysis	基金・GSICSフェロー
佐藤 正弘	21K13276	若手研究	新	COVID-19の感染リスク等に関する社会的学習の実証研究	基金
劉 庭秀	19KK0272	国際共同研究 加速基金 (国際共同研究強化(B))	継	遊牧民のエネルギー・環境問題の実態解明と持続可能性の再構築—HEVの有効利用策—	基金



キャリア講習会

国際文化研究科では、毎年、研究職、ビジネスパーソン、専門技術職など、さまざまな分野で活躍する修了生を招いて、就職の経験談、アドバイスを研究科の後輩にお話しただいている。昨年度は、コロナ禍のためオンライン開催となったが、逆にその利点を活かして海外で活躍する修了生による「国際キャリア講習会」が実現した。令和3年1月10日開催の講習会では、タイから本研究科に留学し、修了後、出身国での教育研究職についてロイケオ・スィリアチャーさん、サリンラット・カウィーチャールモンコンさん（いずれも言語科学研究講座）から、日本での異文化体験、研究と就職活動、今の職業を選んだ理由、大学院で学んだことは役立っているか、などについて話を聞きながら語り合った。参加者からは「大学院在学中や帰国する前にすべきことなど有益な情報を手に入れることができ、今から将来計画を立てて事前準備ができる」などの感想があった。（江藤裕之）



公開講座

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、令和2年度国際文化基礎講座は中止にせざるを得ませんでした。オンラインイベントの実施スキルや経験が蓄積されてきたことや、大学の社会貢献の重要性を踏まえ、令和3年度はライブ配信形式で国際文化基礎講座を実施することになりました。今年度は「ことば」とヒト～そのとき、脳と心で起きていること～というテーマの下、令和3年11月13日(土) 13時開始を予定しております。今回は1日での開催とし、言語科学総合講座の中山真里子准教授と鄭 嬌婷准教授から、「発話準備の脳内プロセスと表記の影響－漢字とかなで何か異なる？何が異なる？」(中山准教授)と「脳から見た効果的な外国語学習法」(鄭 准教授)という演題で、お話しただく予定です。申込方法については、東北大学国際文化研究科のwebサイトをご参照ください。今年度は無料での開催になっております。多くの方のご参加をお待ちしております。(青木俊明)

オンライン入試説明会

令和3年度は新型コロナウイルス感染症予防の観点から7月末のオープンキャンパスが中止となりました。そこで、本研究科では昨年度と同様にオンラインによる入試説明会を7月9日(金)の18時から約1時間半にわたり開催しました。説明会には国内外から10名の参加者があり、入試実施委員長および各講座と英語コースに在籍する学生から本研究科の概要や特色が説明されました。参加者からは多くの質問が出され、本研究科への関心の高さがうかがえました。なお、オンライン入試説明会は今年も開催する予定ですので、研究科ホームページのチェックをよろしくお願いいたします。(小原豊志)

入学を希望される皆様へ

春季入学試験は
令和4(2022)年2月9日(水)、10日(木)に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。
なお、上記の入学試験の詳細については、本研究科ホームページをご覧ください。

お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

連絡先

東北大学国際文化研究科 教務係
TEL: 022-795-7556 / FAX: 022-795-7583
E-mail: int-kkdk@grp.tohoku.ac.jp